
ドッペルゲンガー

LAWSUN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドッペルゲンガー

【Nコード】

N5327Y

【作者名】

LAW SUN

【あらすじ】

織斑一夏の双子の弟、織斑秋二^{シユウジ}。

兄に比べ落ち着いた彼もまたISを使うことが出来たのだった。

いろいろな二次創作を見て、自分も書いてみたいと書き始めたもの。不定期でひっそりと上げていく予定（予定ですらない）

ここにはまことの男が少ない。だから、女性が男性化する。つまり、本当に男らしい男だけが女の中に女を解き放つ。

『ツアラトウストラかく語りき』

窓から見える青空は不思議と心を穏やかにしてくれるような気がする。織斑秋二は体験する。態々教室の中を見回すような愚行はない。自分の席が先頭なので周囲の注目を一身に受けている事を確認することは出来ないが、恐らく予想は当たっていることだろう。

女性にしか使えないISの操縦者を育成するIS学園には必然的に女性しか入学できない。そのIS学園に男が混じっていれば注目を浴びないはずが無い。上野のパンダが人気を博すように、このIS学園では男という生き物は見世物のようなものかもしれない。

入学式が終わり、教室に戻ってからずっと針の筵となっていたがそれを気にせず参考書を読んでいたのが功を奏したのか、席の周りに集まってくるようなことは無かった。

現在、クラスでは自己紹介が行われており、もう少して自分の番が来る。不幸中の幸いとしてトラブルメーカーの一夏は別のクラスで助かった。別のクラスといっても隣のクラスであるのだが、まあそんなことはいい。

「あー、じゃあ次織斑」

担任の、些かだらしの無い女性、佐藤詩織が声を出す。それに返事をして立ち上がり振り返って「織斑秋二です。よろしく願います」とだけ言って、そそくさ座ろうとすると佐藤先生に止められた。

「あー、他に何か言うことはないのか？ ほら趣味とか」

「趣味は読書と音楽鑑賞です」

「好きな食べ物は？」

「麻婆豆腐」

「ちゃんと答えられるじゃないか。じゃあ最後にもう一つ好きな女性のタイプは？」

「平塚らいてう」

佐藤先生は「真顔で答えるか」。詰まらないな」と言って天を仰いだ後、ぶつぶつ言いながら自己紹介を進めていった。自己紹介ではないが気にすることも無いだろう。後方から不満が聞こえるが知ったことじゃない。閉じておいた参考書を開いて、また読み進めることにした。

事前に詰め込んだ知識で授業も滞りなく進み、授業の合間の休憩にも人が寄ってくることは無かった。相変わらず視線の雨に晒されていたが、まあいい。

参考書を読んでいるところで、誰かが近づいてくるのがわかった。本を閉じ、顔を上げるとそこにはブロンドの髪を縦ロールにして伸ばした女性が立っていた。

「ちよつと、よろしくて？」

「構いませんよ。初めまして、私は織斑秋二と申します」

「ええ、知っていますわ織斑一夏さんの弟さんでしょう。私は入試主席のセシリア・オルコットですわ。まあ貴方は織斑一夏さんよりは礼儀を弁えているみたいですからねど・・・」

他人に礼儀を求めるわりには随分と恥知らずな人だ。立ち振る舞いや仕草は確かに精錬されていて、育ちのよさを感じさせる。しかし、ジョングル英国人はいつから恥知らずになっただんだ。

「それで何の用かな？」

「いえ、私は入試主席ですから素人の貴方の手助けがしたいだけですわ。困った事があつたらなんでも質問して構いませんわよ」

「それなら一ついいか？」

「いいですわ」

「アラスカ条約が形骸化していることについての君はどう思う？
条約ではISの軍事利用は禁止されているが、どの国も態々軍隊を解体してまでISの開発を推し進めている。そのお蔭で各国の機動戦力は十分の一以下にまで削減されている。しかし、ISが出来たからといって戦争が無くなる訳じゃない。それにも拘らず戦力を減らすということは、ISを戦力として見做していることの証左じゃないかな。空軍の基地だったところは戦闘機の代わりにISが常駐するようになった。そのうち空母にもISが乗るようになるさ。何処の国も今はISをどうやって軍事利用し、その上で民衆を納得させる大義名分に頭を悩ませているんじゃないか？これが私の考えなんだが、ミス・オルコット、君はどう考えている？」

我ながら意地の悪い話だと自覚する。入試主席という事を強調してきたのだから、おそらくオルコットは何かしらの国の代表候補生であろう。アラスカ条約の形骸化についてはすでに暗黙の了解となっている。しかし、国家に帰属する人間がそのことを認めれば、即国際問題に発展する。故に答えることが出来ない。

「・・・それは」

オルコットが言いよんでいる間にチャイムが鳴った。

「時間だ。教室に戻った方がいい。担任は誰か知らないが怒られたくは無いだろう？」

そう言うとオルコットは渋谷帰っていった。そのオルコットと入れ替わりに入ってきた佐藤先生がニンマリ微笑んでいたのが気になった。

何なんですか？ 男性で唯一ISが使える人間として織斑一夏が世界中で注目的になったのは記憶に新しい。そして織斑一夏には一卵性双生児の双子の弟がいて、同じ遺伝子を持つ彼も同様にIS

を起動することが出来た。

織斑一夏の印象は状況を理解できていない愚鈍な亀といったところ。ISが使えるのなら今まで見てきた男達とは違うかもしれないという期待もあったが、それも無駄に終わった。教官を倒したなどと言っていたが、どうせ何かの間違いだろう。

織斑一夏と同じなのだからどうせ無駄だと思ったが、念のため見に行った。何処に居るかは知らなかったが、一組と同様の人だから二組にも出来ていたためすぐにわかった。人だかりを掻き分けて教室に入れば、そこにいた。

兄と同じ黒い髪は絹糸のようにまっすぐに伸びていて、一見女性と間違えてしまいそうになる。席に着いて参考書を見る姿は織斑一夏と同じだが、彼の顔は至って平静で、眉間に皺を寄せ、如何にもわかりませんというような顔をしていた織斑一夏とは全く違った。

もしかしたらという期待が蘇ってくる。しかし、その期待は織斑一夏とは別の形で裏切られた。

『アラスカ条約が形骸化していることについての君はどう思う？』
正直に言うと、彼の話の半分くらい聞き逃していた。考え付かなかったわけではない。ISが兵器としての一面を持っていることは知っているし、理解しているつもりだった。ISに乗っていても戦争なんて言葉は遠い遙か向こうの世界の出来事ぐらいの認識しか持つていなかった。

『ミス・オルコット、君はどう考えている？』

奥歯が歯軋りを立てた。気付かぬうちに力が入っていたようだ。

何なんですか？ 何も知らずにへらへらと笑う男の顔。口を真一文字に結び表情を変えない男の顔。二つの同じ顔が浮かんでくる。似ているのに全く似ていない。

クラスでは今、代表を選出しているが、珍しいというだけで織斑一夏が選ばれようとしている。正直、我慢の限界だった。

納得がいきませんわ！！

「バンドもそれにはしゃぐ人達もあのドツペルゲンガーも全部もつ一度歯が軋む音がした。」

「納得がいきませんわ！！このような選出は認められません」感情の昂りに任せてセシリア・オルコットは声を上げた。

それから事は、はっきり言つてあまり覚えていない。怒りに任せて有ること無いこと言い散らかしたような気がする。我ながら見苦しいと思う。

クラス代表の座を賭けて試合をすることになったのは僥倖だ。あの男を地に這い蹲らせれば、このイライラも収まるかもしれない、そんな思いがあった。

「じゃあクラス代表は秋二君で決定ね」

隣のクラスから罵詈雑言が飛び交っている余波が聞こえてきたが、気にしないことにする。クラス代表に選ばれたことは面倒臭いが、仕方が無い。どういう意図かは読めないが、織斑秋二を矢面に立てることで、このクラスはある種の一体感を持っている。こうなってしまうえば反論の余地が無いことは明らかだ。

「それでは秋二君、クラス代表になった意気込みをどうぞ」

「不肖の身ではありませんが、代表として選ばれた以上、それに見合うように努力する所存であります」

教室を一望してから礼をして席に着く。我ながら、似合わないと思う。傍から見ていたら嘔飯モノだっただろう。そのことは佐藤先生も気付いていたようで「かたいな」。もつと気楽にしたら？」と言われた。

「そうですね、自分でもそう思います。気付かないうちに緊張していたみたいです」

そう指摘されるまでも無く気付いていたのだが、俺はおどけて見せた。

後日明らかになる事ではあるが、織斑秋二がクラス代表に選ばれたのは、この学園で珍しい男子を代表に選べばいいという押し付けだけではなく、昼前のオルコットとの対話の際の毅然とした態度が評価されていたらしいが、まあそんなことはいい。

02 - Stand by me

汝が汝自身のごとく隣人を愛するとき、汝はまたその隣人を愛するごとく、汝自身をも愛さねばならない。

『愛と生命の摂理』

今日という日は激動の日であったと織斑一夏は嘆息する。IS学園に入学し、七年振りの幼馴染と再会し、姉には叩かれ、セシリアとか言うニューシシユセキのダイヒョウコウホセーサマに喧嘩を売られて、買って、家に帰ろうと思えば、今日から寮生活だと言われ、私物を殆ど回収できず、部屋に入ったらバスタオルを身体に巻いただけ箒が居て、襲い掛かれて、秋二には会えなかった。

「あいつも大変なんだろうな」

ベットに横になって、独り言が口から出たのは疲れているせいだったと思う。それに箒が同じ部屋に居るのも忘れていた。

独り言のつもりだったのに「どうかしたか？」と聞かれて、少し焦ってしまった。それでも平静を装って「秋二のことさ」と答えられた自分を褒めてあげたい。

「あいつも俺と同じでこの学園に入学した筈なんだけど、会えなくてさ。如何してるのかなと思ってさ」

今日から寮生活だと言われたときは、どうせ秋二が相部屋だろうと思っていたものだが、どうしてこうなった。

「秋二か、元気にしてるのか？」

「そりやもう。七年前とは大違いさ」

心配させないようにおどけて見せたが、それとは裏腹に箒の顔は少し陰った。あまり触れない方がいいのかもしれないと思って、少し強引に話題を変える。

「あのさ、箒」

「なんだ？」

「俺にISを教えてくれないか？俺はISについて何も知らない。セシリアには啖呵をきって見せたけど、このままじゃ勝てない。だから黙って負けを認めるなんて嫌だ。俺には箒の助けが必要なんだ。頼む」

向かいのベットに腰掛けている箒に頭を下げる。

「ま、まあ、そこまで言うのであれば教えてやらないことも無い。顔を背けながらも箒は了承してくれた。あまり気乗りはしないのかも知れないが、協力してくれることを純粋に感謝した。」

その後話し合った結果、知識に関しては完全に俺の責任ということで、まず参考書を熟読することが言い渡された。この参考書、電帳みたいなのでかさなのに、一週間で覚えるとかみんな鬼だ。

ISの操作訓練はISの使用許可を得るのに時間がかかるということでもまずは操縦者の身体を鍛えようという話になった。つまりは俺の身体を鍛えなおすということだ。放課後に剣道の練習をするという話だったが、全国一位の箒と打ち合ってもコテンパンにされるだけのような気がする。

とりあえず、強くないと。セシリアの奴をギャフンと言わせてやる。

放課後になってすぐにIS使用許可の申請に行ったら、受付の人に驚かれた。なんでも入学初日から申請に来る人はいないそうだ。お蔭で明日にでも使えるらしい。尤もそれ以降は時間がかかるようだ。申請用紙に氏名を書いて受付の人に提出する。

「それでは、許可証を発行しますので明日の放課後にまた来てください」

ありがとございますと頭を下げた立ち去る。今日のところはも

う用事は無いので帰ることにした。大して荷物の入っていないカバンを提げて、歩いていると校門の横に姉さん、織斑千冬が立っていた。

「どうかしたんですか姉さん」

「織斑先生と呼べ。どうしたもこうしたも無いが、お前は家に帰るつもりだったろう？」

姉さんなりに立場はハッキリとしておきたいらしい。ここでは姉弟の関係ではなく、教師と生徒であるということだろう。公私混同をしないのは、教師としては当然のことなのだろう。少し淋しいような気がしたが、仕方が無い。

姿勢を直して返事をする。

「そうです」

「今日から寮に入ると佐藤先生から聞かなかったのか？」

「初耳ですね。一週間は自宅から登校するはずでしたが？」

そう答えると姉さんは頭を掻いて「またあの人は・・・」とぼやいていた。抜けた印象のある佐藤先生だが、その印象は間違いではなかったらしい。

「変更だ。お前も今日から寮生活だ」

「まあ、相部屋が一夏なら家とあまり変わらないし問題ないですね」

「・・・一夏とは別室だ」

「・・・ホントですか？」

「ああ」

今度は二人で頭を抱えた。何の陰謀だこれは？ 姉さんの反応から見て、一人部屋という線は薄い。つまりは見知らぬ誰かと相部屋になるということだ。この部屋割りを考えた奴は何を考えているのか問い質したい。

「唸っていても状況は変わりませんから、とりあえず、その部屋まで行きましょう。先生は相部屋の人に説明をお願いします。私はその人に謝罪します」

「お前が責任を感じる必要はないぞ秋二。悪いのはこの部屋割りを組んだ馬鹿と運だけだ」

状況を整理しながら二人で並んで寮へと向かう。昔は見上げていた姉さんの顔も、いつの間にかまっすぐに見つめられるようになったものだ。この分ならずすぐに追い抜いてしまいかもしれない。その事に少しだけ顔が綻んだ。

「申し訳ありません」

ドアが開いた瞬間に頭を下げた弟を見て織斑千冬はため息を吐いた。確かに謝罪すると言っていたが、いきなり言われれば相手も戸惑うだろう。案の定ドアから顔を覗かせた更識簪はキョトンとしている。

「秋二、いきなり謝っても相手を困らせるだけだ。更識、中に入れてもらっていいか？」

「・・・あ、はい、どうぞ」

おどおどする更識を先頭に私たちは部屋に入った。

「話は聞いていると思うが、こいつが相部屋になる織斑秋二だ。更識にはすまないが新しい部屋割りが組まれるまでこいつと上手くやって欲しい。こいつの人格については私が保証する。おい秋二、挨拶をしる。謝るなよ」

「初めまして、織斑秋二と申します。よろしく申し上げます」

「よ、よろしく申し上げます」

ペコペコと頭を下げあう二人。これではまるで話に聞くお見合いのようだ。あいにくと未経験であるが、知ったことか。

「固くなり過ぎだ二人とも。これはお見合いじゃないんだぞ」

我が弟ながら呆れたものだ。ここで私が「後は若い二人に任せて」だけでも言って退出すれば、本当にお見合いになりかねん。ある程度は任せておこうと思ったが、無理だ。そう思い至って、二人の間を

取り持つことにした。

その後の事を一言で言うなら、やはり、お見合いのようであったと言っほか無い。

次の日の教務室では織斑千冬のため息が度々聞こえたが、その真意を理解するものはいなかった。

03 - 造花が笑う

人の一生は重荷を負うて遠き道を往くが如し。急ぐべからず。不自由を常と思えば不足なし。心に望み起こらば、困窮したるときを思い出すべし。

堪忍は無事長久の基。怒りは敵と思え。勝つ事ばかり知りて、負くること知らざれば害その身に至る。

己を責めても人を責めるな。及ばざるは過ぎたるより勝れり。

『徳川家康公遺訓』

「ではこちらが、IS使用許可証となります。どのアリーナーを使っても構いませんが、事故の無いようにお願いします」
礼を言っ受付の人から許可証という名の紙切れを受け取る。その紙切れを仕舞い込んで、足早にアリーナへと向かった。

今日することは、ISの機動訓練だ。戦闘において最も重要なことは火力でもなければ、技術でもない。もちろんそれらも戦闘に於ける要素の一つではあるが、一番は足である。今自分がどのような状況にあるのか、どうすれば良いのか、それらを把握し、それを行動に移すことが出来なければただの的だ。

そのためにも機動に最優先で時間を割かなくてはならない。それに、訓練機で出来ることなど限りがある。まずは土台を固めることから始めよう、と織斑秋二は踵を鳴らせた。

セシリア・オルコットが織斑秋二を見かけたのはほんの偶然だった。腰にまで達しようかという黒髪を靡かせながら歩く姿は、見聞

違えようが無かった。

彼は声をかける隙も見せず足早に歩いていった。もともとの体格差もあって、追いつけそうにはない。

大声を出して呼び止めるのも見つとも無いし、ここで引き下がるのは何だか癪だった。

そこから彼の後をつけることになったのは必然だったと言える。足音を殺し、至って自然に後をつけた。

彼についてやって来たのは第三アリーナだった。こんなところに何の用が？

その疑問も彼の行動ですぐに氷解した。彼はポケットの中から紙切れを取り出し、整備員に見せるとすぐに、ISに乗り込んだ。

一番最初に思ったことは素人にしては随分と慣れたようにISを扱うものだ、で、次に思ったことは何故という疑問だった。

彼は何故入学二日目にしてISの訓練をしようと思ったのか？

それから呆けたように彼の動きを眺めていたような気がする。始めた頃のぎこちなさは消え、今では鳥のようにアリーナを飛行している。これがISに初めて乗る素人の動きには到底思えなかった。

結局、監視員に締め出されるまでの2時間弱、彼はずっとISの飛行訓練を続けていた。

アリーナから閉め出され、部屋に戻ろうとすると、織斑秋二とばったり会ってしまった。しかし、不思議と気恥ずかしさは感じなかった。それよりも興味が勝っていたからかもしれない。

「ごきげんよう。ISの動きを見せてもらいましたけれど、初めて動かしたとは思えないほど機敏な動きをしていましたね」

「初めてじゃないさ」

そう答える彼の顔には少し陰りが伺えた。一見、自虐にも思われ

る。もしかしたら素人ということに気がしているのかもしれない。時間も限られているので二人で並んで廊下を歩いていく。

「入学するときに動かしていたんですものね。それでも素人とは思えませんでしたわ」

「・・・イギリス代表候補生の君に褒められるとは光栄だね」

素人という言葉にはやはり敏感のようだ。今も少し顔をしかめている。

「あら、ご存知でしたの」

「君は有名人だからね」

大袈裟に驚いてみせると、彼は皮肉っぽく返したが、そうやって笑うのはなかなか様になっていた。

今なら聞けるかもしれない。そう思うが早いかな、気付けば口から声が出ていた。

「入学二日目からISの訓練なんて、勤勉なものですな。何処かの誰かにも見習っていただきたいものですわ」

そう言って横目で彼の表情を伺うとさっきまでの笑みは消え失せ、闇のように深い彼の眼に視線が釘付けになった。否、怯えていた。

見たこともないような生物に出くわしたかのように体が動かなかつた。立ち止まって彼の言葉を待つ。遅れた私を彼は振り返ると視線をまっすぐに合わせて、口を開いた。

「それは勤勉にもなるさ。自分が望む望まざるに関わらず、今ここにいるということは、本来ここにいるはずだった人間を私は何の努力もなしに踏みにじったことに等しい。私はその上で胡坐をかいていられるほど図太くは無いし、厚顔無恥でありたく無い」

そうはつきりと言う彼の視線から、私は眼を逸らした。何故かはわからないが、自分の中で、言い知れぬ怒りのようなものが渦を巻いているのは理解した。

私は恥も外聞も捨ててそこから逃げ出した。

部屋に着くと制服のまま、ベットへ飛び込んだ。ルームメイトが

心配そうに声を掛けてくるのを無視して、布団に潜り込んだ。

もう何度天地がひっくり返ったことだろうとぶれる視界の中で織斑一夏は思考する。仰向けに倒れて、荒い息を整えながら、唾を飲む。

「何時まで寝ているつもりだ？ 立てないというなら立たせてやるぞ」

目の前には竹刀を持った鬼がいる。後ろでまとめてある長い髪を振り回して襲い掛かる姿はまさしく……。

「ぐえ」

「馬鹿なことを考えている暇があるならさっさと立て」

竹刀を振り下ろされてまた視界が歪む。いくら竹刀だって力任せに叩けば死ぬんじゃないか？

これ以上叩かれるのは御免なので、足をふらつかせながらも立ち上がる。

「よし、もう一度だ。構えろ」

「いや、流石にこれ以上は無理だつて。そもそも全国一位の箒に俺が敵うわけ……」

「甘っちょろい！！ やる前からそんな弱気でどうする！！ 中学でやっていかなかったとはいえ、この体たらくではあの女に勝つなど不可能だぞ」

そう言われると反論できない。しかし、こっちだって押し込まれるわけにはいかない。ここで押し負ければ俺に明日は無い。

「そうは言ってももうそろそろ切り上げないと学食も閉まるし……」

「そう言つと箒も押し黙る。これならいけるか。」

そのまま箒を丸め込むと俺達は一度部屋に戻ってから、学食に向かうことにした。

男の人と並んで歩くのなんて人生で初めての事だと思うと更識簪は緊張した。隣を歩く織斑秋二の横顔をちらりと盗み見る。ISの機動訓練をしてきたというが、その顔に疲れはさして伺えない。

初めてあった時の印象は変わった人。表情を変えずに頭を下げる彼の姿に面食らってしまったのは、記憶に新しい。あの場に織斑先生がいなかったらと考えるとあのまま日が暮れていたかもしれない。ふと口元が綻んでいることに気が付いた。人前で笑ったのなんて久しぶりかもしれない。顔を上げるといつの間にか前を歩いていた秋二君が不思議な顔をしてこっちを見ていた。

「どうかしたか？」と聞く彼に「なんでもない」と言っただけで彼の隣に追いついた。

学食は賑わっていたが、ちょうどテーブルが一つ空いていたから難なく座れた。私は和食の定食を買ひ、秋二君はカツ丼とラーメンに加え、その横に炭酸飲料をテーブルに並べている。

バランスも何も無いそのメニューを見て、私の口から言葉が飛び出したのは至極当然だった。

「秋二君、もう少しバランスとか考えた方がいいんじゃない？」

「よく言われるが改めるつもりは無いよ。健康は食事からと言うが、禁欲の果てにある健康なんて要らない。健康でなければいけないなんて法も無いしね」

そう言った後に「ナチスドイツじゃないんだからさ」と付け加えて、ラーメンを啜った。

「好きなものを好きなように食べて、その結果長生きできなかったとしても私はそれで満足だ」

「うーん、でも、健康であることに越したことは無いんじゃないかな？」

「確かに健康であることに越したことは無いが、健康でない人間が劣っているわけじゃないし、・・・それに俺は好き嫌いが多いんだよ」

そう言つて彼は悪戯っぽく笑うと今度はカツ丼をかき込んだ。

今まではいつも大人びた印象を見せていた秋二君が、子供みたくに笑つたことに私は驚いた。

彼が炭酸飲料を呷つているところに私の背後から声がかげられる。私にとっては突然のことだったが、ちょうど向かいに座っている彼は落ち着いて答えた。

「秋二！ こんな所にいたのかよ。いやあ、立つた数日振りなのに随分と久しぶりな気がするぞ。一緒に飯食おうぜ」

「構わんが、あまり騒ぐな一夏。それと隣の彼女は？」

彼が噂の織斑一夏なんだろう。さっきまでの多かつた視線がさらに増えるのが体感出来る。しかし、彼の登場によつて秋二君の顔が元に戻つてしまったのは少し残念だった。

「筈だよ。覚えてるだろ？」

「・・・ああ、見違えたんで気が付かなかつたよ。久しぶり、でいいのか筈」

「ああ、久しぶりだな。それにしてもその髪は何だ？」

そう言われた彼は髪を弄りながらため息を吐いた。

「こうでもしておかないと一夏と間違えられるんだよ。それは良いとして、彼女はルームメイトの更識簪だ」

「は、初めまして」

焦らなかつたわけではないが、後ろを振り返りながらお辞儀をするのは大変だということがわかつた。

その後二人の自己紹介を聞いてから、四人で食事を取ることになつた。

結局、織斑一夏君目当ての女子が大勢集まつてきて、大所帯になる頃には、私も秋二君もその場からこっそり逃げ出していた。

いつの間にかいなくなっていた二人に一夏が気付いたのは、自分の食事を摂り終わってからだった。

羽が生えれば、親鳥を棄てるのが当たり前だろうが。

『ベニスの商人』

今から始まるセシリアとの試合まで、剣道の特訓しかしていなかったと篠ノ之箒は記憶する。

そうなってしまったのは一夏が不甲斐ないせいであって私の責任ではないはずだ。今も横で文句を垂れているが無視だ。ふいと顔を背けると「無視すんなー！」と一夏が声を荒げている。

これから試合だというのに、何とも緊張感の無い奴だ。昔からそういう奴だったが、もう少し秋二を見習って貰いたいものだ。

秋二を見て思ったことだが、七年も経てば、普通、人は変わるものなのだろう。秋二は一夏とは違って随分と変わったように見えた。髪が伸びたとか、背が高くなったとかではなくて、身に纏う空気と違うのか、そういうものが大人びていた。

七年前の秋二はいつも私たちの一步下がったところにいた。運動は出来たが、もともと体が弱かったこともあって、運動しているところをあまり見なかった。見たことのあるのは一緒に剣道をしていた時ぐらいのものだと思う。

だから、一夏が秋二のことを「そりやもう。七年前とは大違いさ」と言ったとき、私は言いようのない寂しさを覚えた。

七年経っても一夏は変わっていないかったが、秋二は変わった。私も一夏が言うには「一目でわかった」らしいが、秋二が言うには「見違えた」らしい。

私は七年で変わったのだろうか？ 変わってないのだから

うか？ 変わろうと望んだらうか？ 変わりたくない願っただらうか？

「来ました！ 織斑君の専用IS！」

山田先生が大声を出しながら飛び込んできたことで私の思考は遮られた。私はその事にホツとした。

山田先生の方に顔を向けるとその横には無骨な置物があった。否、あれこそが一夏のISなのだろう。一次移行も最適化処理も済んでいない鈍色のISに一夏は見蕩れている。

私はその横顔に見蕩れていた。

時間になっても現れない秋二を探して織斑千冬は校内を歩き回っていた。寮の部屋から学校の屋上まで探してみたものの、一向に見つかる気配が無かった。急がなければ一夏の試合が始まってしまおうというのに。

こうなってしまったのも佐藤先生の怠慢だというのに、何故態々私とその尻拭いをしなければならぬのだ。

すれ違う生徒が怯えていたので、多分私の眉間には深い皺が刻み込まれていたのだろう。

後日呼び出せばいいかと考えているときに窓の外に秋二の姿が見えた。木の下に位置するベンチに腰掛け、読書をする秋二に腹が立ったのはしょうがない。これも佐藤先生の怠慢のせいだ。

「こんなところにいたのか。探したぞ」

声を掛けるまでこちらに見向きもしなかったあたり、集中して読書をしていたことが伺える。本に頬を挟んで、顔を上げた秋二は驚いたような顔をしていた。

「どうしたんですか、こんなところに」

「それはこっちの台詞なんだがな。まあいい、お前の専用機が届

いたから今の内に一次移行と最適化処理を済ませておこうと思つてな。本来なら佐藤先生から話が行っている筈なんだが、その様子では知らなかったようだな」

佐藤先生は後で説教だな。

私が「着いて来い」と言つて歩き出すと、慌てた様子もなしに私の隣に並ぶ。

私が切れと言つても切ろうとする気配の無い長い髪を揺らしながら歩く姿は、遠目からは女性に見えるだろう。本人は自覚していないようだが、この学園において秋二よりも一夏の周りに人が集まるのは、人柄も関係しているだろうが、言つてしまえば女と勘違いされているからである。IS学園の制服はある程度の改造が認知されているため、パンツを好んで穿く生徒も多い。秋二はそのうちの一人と勘違いされているようだ。

隣を歩く秋二が不意に話しかけてきた。

「それにしても専用機が出来るのが早すぎませんか？」

「もともと倉持技研が開発していたものを引き取る形になったからな。一から作ったわけじゃない」

私がそう言つと秋二は顔を綻ばせて「ダウト」と言つた。

「東さんでしょ」

「……その通りだ。もともと倉持技研では手に負えないと凍結されていたプロジェクトを東の奴が完成させたものだ。よくわかつたな」

モルモット「素人にそこまで入れ込む人はそういないでしょう？」

「それでもないようだぞ。お前達のためにその他のプロジェクトをかなぐり捨てている様だしな」

それ程までにISを使える男に執着しているらしい。男でも使えるISを開発しようとしているのか、ISを使える男を研究しようとしているのかは定かではないが、どちらにしろ弟がモルモット扱いされてはいいい気分ではない。

「それよりも急ぐぞ。もう一夏達の試合はもう始まっている頃だ」

「わかりました」

その返事を聞いて私は歩幅を広げた。

ピットで一次移行と最適化処理を行いながら見た一夏の試合は、敢闘賞はあげてやってもいいくらいのものであったと織斑秋二は評価する。

姉さんと二人でピットに着いたときに、ちょうど一夏はミサイルの直撃を食らった所だった。そこで白式という一夏の専用ISが一次移行し、首の皮一枚繋がったが、最後は自分の武器の特性を理解せずに自滅という結果で終わった。

無傷で勝利したオルコットは、油断していたとはいえ流石は代表候補生といった所だろうか。

私としては試合よりも、七年振りになるらしい幼馴染の表情の変化を見るほうが楽しかったというのは秘密だ。

目の前では沈んだ様子で帰還してきた一夏を箒と姉さんが顔を綻ばせながら叱咤しているという、何とも微妙な光景が展開されていた。

気を抜いていたため、一通り言い終えてからこちらに振り向いた姉さんの言葉に対応できなかった。

「よし、次は秋二だ。オルコット、連戦になるが問題ないか？」

『問題ありません』

「よし、行け」

「……………聞いてませんよ、そんなこと」

「言っていないからな。いいから行け」

問答無用とはまさにこういうことを言うのだろうか。

「……………了解しました」

『呉葉』俺の専用機。基本的な装甲は白式と似ているが、カラーリングは深い赤を基調に置いたデザイン。武装に関しても刀一本の

白式とは対称的で、近接用の武装が一切無かった。切り札となる単
一仕様は白式同様搭載されているらしい。ジョーカー
ワン

スペックの確認もそこそこに、ISに身体を預けて発進する。

その途中で「負けるなよ！」と言う一夏の声が聞こえたが、返事はしなかった。

アリーナではすでにオルコットが待ち構えていた。彼女はスッと伸びた切れ長の眼で真っ直ぐに見つめてくる。

「御機嫌よう、秋二さん。貴方には手加減致しませんわ」

「お手柔らかに頼むよ」

おどけて見せると彼女は彼女は微笑んで見せた。随分と柔らかい笑顔をするようになったと感心する。何かあったのだろうか？

「ふふふ、では私と一緒に踊ってくださいさる？」

「ダンスは苦手なんだがね・・・」

以前会った時との違いに戸惑いながら頭を掻いた。

二人で笑いあっていると試合の開始を告げるブザーが鳴り響いた。

開始と同時にオルコットのライフルから光が奔る。それを回避する間にモシン・ナガンを取り出す。時間をかけずにライフルで狙い撃つが当然のように避けられる。時間をおかずにアヴェンジャーに切り替え、ガトリング砲で弾幕を張るが、オルコットはいとも容易くそれをすり抜けると、BT兵器を飛ばしてきた。右下方と左後方からの射撃を左下方に回避するがそこに待ち構えていたようにライフルの光線が向かってくる。それを加速で何とか避けて体勢を立て直そうとするが、四基の砲台と一人の狙撃手からの攻撃に隙は無く、防戦を強いられることになった。

「逃げてばかりでは、お話になりませんわ」

「せつかく付き合ってるっていうのにそれはあんまりじゃないか？」

せめて口だけでも虚勢を張るが、彼女の言うとおりこのままでは

話にならない。だが、気付いてはいないようだがもうすでに手は打つてある。

SVDライフルを取り出し、逃げながら打ち込んでいく。今はまだ君のターンだ。それはわかっている。真っ直ぐに飛んでくる銃弾を彼女は華麗に避けてみせる。当然だが、まだ甘い。直後、回避した彼女の周囲で爆発が起きた。彼女も、そして周りの人間も何が起きたのかなんて気付いてないはずだ。気付いているのは俺ただ一人ちよつとだけの優越感を身に覚える。

呉葉の武装の一つにマインスプレッドというものがある。粉末状の爆薬を空气中に散布し、その粉末が集まったところに銃弾を打ち込むと爆発するという見えない爆弾。

オルコット、ここからは俺のターンだ。

「演目を変えよう、セシリア・オルコット。君の奏でるワルツはここで終幕。今からは私の指揮する歌劇に付き合ってもらおうか」
何が起こったのか理解できていない彼女を尻目に高らかに言い放つ。

「オペラ…ですか？」

「ああ、主演は君で演目は……『魔弾の射手』だ」

演目を言うのと同時に異様に長いマスケット銃を取り出した。この銃こそが呉葉の単一仕様、魔弾の射手である。

警戒するオルコットの前でゆっくりと銃を構える。狙うのは彼女を守る衛星、その一つに狙いを定めて引き金を引いた。

彼女は当然撃ち落とされまいと回避させるが、銃弾はまるで獵犬のように衛星を食い破った。その事に彼女は驚いたが、指揮者は指揮棒を振り、また別の衛星に喰らいついた。二つの爆炎を眺めて、彼は謳い始めた。

「Was gleich wohl auf Erden
dem J?ger vergn?gen?

Wem sprudelt der Becher des Le

bens so reich?
Beim Klange der Hörner im Grün
enzu liegen,
den Hirsch zu verfolgen durch
Dickicht und Teich

彼の歌声と共に衛星が落ちていく。そして彼女を守る矛がなくな
ったとき、猟犬は彼女へと襲い掛かる。

狩人は私で、貴方は愛しい青い鳥。

彼は猟銃をバトンのように振り回しながら、謳い続ける。

ist frstliche Freude, ist m?n
nlich Verlangen,
erstarkt die Glieder und w?rz
et das Mahl.
Wenn W?lder und Felsen uns hal
lend umfassen,
t?nt freier und freudiger der
volle Pokal!
Jo, ho! Tralalalala! lalalalal
ala...!

彼女は必死に逃げ回る。しかし、猟犬はそれを許さない。ティン
ダロスの猟犬のように銃弾は歌姫を追い立てる。

「Diana ist kundig, die Nacht z
uerhellen,
wie labend am Tage ihr Dunkel
uns k?hlt.
Den blutigen Wolf und den Eber
zufüllen,
der gierig die gr?nenden Saate

n durchw?hlt

誰もが息を呑んで見つめていた。聞き惚れていた。

外す事のない魔弾が獲物を仕留める瞬間を、誰もが持ち詫びていた。

ist f?rstliche Freude, ist m?n
nlich Verlangen,
erstarkt die Glieder und w?rz
et das Mahl.
Wenn W?lder und Felsen uns hal
lend umfassen,
t?nt freier und freud'ger der
volle Pokal!
Jo, ho! Tralalalala! lalalalal
ala...r.

彼が歌い終わると同時に青い鳥は堕ちていった。それと同時に青い雫が零れ落ちた。

それから紅いISが獲物を抱えてピットに戻るまで、誰も口を開くことをしなかった。

05 - くるくる少女

人は何でも忘れる事が出来るが、自分自身だけは、自分の本質だけは忘れる事はできない。

『幸福のためのアフォリスメン』

狩人というよりはも、まるで魔王ではないかと山田麻耶は怯えていた。

始めは劣勢でありながらも、的確に牽制を繰り返し、隙を見せることは無かった。しかし、攻勢に出るからは一方的であった。歌を歌いながら、自由自在に動き回る銃弾が追い立てていく。その姿は歌劇の中の狩人マックスというよりは、魔王ザミエルのようだった。ISを待機状態にし、オルコットさんを抱えて織斑君の弟さんがピットに戻ってきた。彼は地面に落ちた衝撃で気を失ってしまったオルコットさんをそつと脇の方へ横たえる。

その傍に織斑君が興奮した様子で駆け寄っていく。

「すげえじゃんか秋二！！ 何時の間にそんなに上手くなったんだよ」

それと対照的に弟さんは冷静だった。息を荒くして近寄る織斑君を片手で制して注意する。

「怪我人の前だ、少し静かにしている」

「秋二、オルコットはどうだ？」

そう織斑先生が声を掛けるが、少し声のトーンが低く感じられた。「気を失っただけだと思いますけど、素人判断では安心できませんから、保健室に連れて行ったほうがいいと思います」

「まあ、当然だな」

「ということ、後は任せたぞ一夏」

そう言うつとすぐに踵を返してピットから去っていく。その背を当然のように織斑君が呼び止める。

「はあ!？ ちよ、ちよっと待てって。なんで俺がそんなことしなくちゃならないんだ!？」

「俺は疲れたからもう寝る」

振り返ることも無く、靴の音を響かせながら歩いていった。その後姿に織斑先生も声を掛けることは無かった。

「ええつと、どうしたらいいんでしょうか？」

辛うじてその場を切り替えようと声を奮うが、何をしたらよいかわからなかった。

「オルコットを保健室に運ばなければならぬ。一夏、任せたぞ。山田先生も着いて行ってくれ」

そう言うつと今度は織斑先生がピットから去っていった。

その後、残された三人でオルコットさんを保健室に連れて行った。その際、終始篠ノ之さんが俯いていたようだと思ったら、次の瞬間には顔を赤くして怒り出したりと、百面相を垣間見た。

目の前で起きたことであるにも拘らず、先の試合のことを篠ノ之篤は理解できなかった。

一夏と同じく秋二もISに関しては素人のはずだ。それにもかかわらず、秋二の動きは一夏とまるで違った。

一夏はISの練習をしていなかったこともあり、その飛行はお粗末なものだった。試合の途中から徐々にまともになっていったが、あくまで素人にしては及第点を与えてもいいというものだった。

しかし、秋二は違う。始めからあの女と同様にアリーナを動き回っていた。秋二は訓練用のISで練習したと言っていたが、ほんの二、三回でそこまで上達するはずが無い。そして、代表候補生を圧倒してしまった。

私は少し怖くなった。IS学園に入学してから、もつと詳しく言えば、秋二と再会してからずっと胸に引っかかっていたしこり。

一夏達と別れてからの七年間、私はその頃の思い出を糧に生きてきた。友達がいなかったわけではないと思う。それでもどこか壁を作って生きてきた。

だから、IS学園で一夏達にまた会えるとわかって、私は頬に熱いものが伝うのを感じた。

一夏が七年経っても変わらずに、私に気付いてくれたときは、また目頭が熱くなった。それを気付かせまいと顔を逸らしていた。真っ直ぐに見つめたいというのに。

その一夏に連れられて学食に行くと、何かを見つけたのか一夏は走り出した。呆気にとられたが、遅れないように着いていく。

『秋二！　こんな所にいたのかよ』

その声を掛けられて顔を上げる、一夏に似た、幼い頃の面影を少し残した顔。彼の物腰は子供の頃とは大違いだった。髪は伸びきってはいるが、手入れは行き届いているようで、しなやかな黒髪だった。昔も髪を伸ばしていたが、ここまでではなかったと記憶する。今では私より少し短いくらいだ。

『隣の彼女は？』

秋二の口からその台詞が聞こえたとき、私の心がざわついた。だからきつと、気付いたのはそのときだ。

子供の頃の自分達にはもう戻れないのだな。

人は変わる。変わらない方がおかしいと思われる。その変化も、共に過ごせたのなら微笑ましく感じられただろう。

しかし、そう感じるには七年という月日は長すぎた。

「やっぱり、秋二は凄いやな」

そう呟くのは同居人でもある織斑一夏だ。一夏は秋二のことをどう思っているのだろう。

「そうだな。七年間で随分と変わった」

「そんなに変わったか？」

気付いていない一夏に「ああ」と返事をして立ち上がった。七年間隣に居たから気付かないのかもしれないな。

「そろそろ食堂に行くぞ」

「ああ、わかった」

返事をして一夏もベットから立ち上がる。早足で歩いてくるのをドアを開けて待つ。

二人並んで歩き出すと唐突に一夏が呟いた。

「秋二が歌ってたのって何の歌だ？」

「知るか」

今日は食堂を利用するのはやめておこうと織斑秋二は決意した。

都合のいいことにキッチンの戸棚の中にはパスタがあったので、問題は無いだろう。更識の私物かもしれないから断りは入れておいたほうがいいかもしれないが、生憎と今は席を外している。事後承諾という形になるが、仕方が無い。

そう思っているところに、更識が帰ってきた。

「お帰り」

「・・・ただいま」

帰ってきた更識の様子がおかしいが、どうかしたのだろうか？

「調子でも悪いのか？」

「！？ うっん、なんでもないよ」

それだけ敏感に反応すれば丸わかりだが、話したくないことなら触れないで置こう。

「ああ、そうだ。このパスタ貰っていいか？ 後で代わりの買っ

てくるからさ」

「いいよ、気にしなくても。でも、どうして？」

「目立つちゃったからね。暫くは学食に行かないようにしようかなど」

そう言つと俯きがちに「そっか」とだけ言った。

俺は話を変えようと更識に切り出す。

「更識はどうする？ よかったら作るけど」

「いいよ、私のことは気にしなくても」

腕を大袈裟に振るいながら、遠慮する。もしかしたら男の料理なんて不味いと思つてるのかもしれない。

「茹でる量が変わるだけだ。大した手間じゃない」

「・・・それなら、お願いしようかな」

更識は控えめに返事をする。

断られたらそこまでにしておこうと思つていたが、了解は得ることが出来た。

俺は戸棚から適当な鍋を取り出して、パスタを茹で始めた。

これまでの人生は苦難の連続であつたとセシリア・オルコットは記憶する。

尊敬する母に先立たれ、幼いながらも当主としての自覚を持たねばならなかつた。

家を取り潰そうとする外戚達を押さえ込み、家を守らねばならなかつた。いくら子供だといつても、そのことは侮りを誘発するだけで、誰も手を差し伸べてくれるものはいなかつた。それでも私は私を、私の家を、慕つて着いて来てくれる人の為にも、亡き母の為に、負けるわけにはいかなかつた。

一人娘であることを呪つた事もある。どうして私には姉が、兄がいらつしやらないのだらうと。姉が兄がいてくれたのなら、まだ私

は子供のままでいられたのに。

私は環境に適応するために、変わらざるを得なかった。

子供なりによくやっていった方だという自負はあったが、それでも家の衰退は免れなかった。

そこに光明を齎したのがISであった。ISの操縦者となり、国を背負って立つほどの人間に成れば、家の再興もわけは無い。ISの適正がAであったこともあり、私はISの国家代表になろうと亡き母に誓った。オルコットの名を晒った者たちに見せ付けてやるうと。

ISの訓練は妥協しなかった。ライバルは多く、席は少ない。そんな椅子取りゲームを勝ち続け、遂には代表候補生になった。

しかし、まだまだ。まだ上がある。国家代表までの道程は長く険しいが、歩を止める気は毛頭ない。

IS学園入学の話が来たとき私は一も二も無く返事をした。各国のIS操縦者が集まり、切磋琢磨する学び舎。それは私が望むものだった。

IS学園の入試を主席で合格し、私はちょっとした優越感を感じていた。今、思えばもうすでに慢心が私の心を巣食っていたのだろう。もつと言え、代表候補生になることが決まったときからかもしれない。

しかし、そのとき私はそれに気付いていなかった。

それに気が付いたのは先の試合。素人と侮り、冷静さを欠いて、最後は後一步違っていたら私が負けていたというところまで追い詰められた。正直に言って、あの勝負を勝ったと胸を張っていえるはずが無い。それでも不思議と不快ではなかった。

己の未熟を再認識させてくれた、真っ直ぐな瞳。今まで見てきた男達とは違う眼。

そして、彼とはまた別の眼をした人を想起する。一見するとそっくりなように見えて、その本質は全く違うように感じられた。

連戦ではあったものの、損傷は軽微で、ビットも替えが利く。何も問題は無かった。気付かずに放って置いた油断も捨てた。その前の試合で気が付いたというのもあるが、それよりも何よりも、彼と本気で向き合いたいと思ったからだ。

『自分が望む望まざるに関わらず、今ここにいるということとは、本来ここにいるはずだった人間を私は何の努力もなしに踏みじつたことに等しい。私はその上で胡坐をかいていられるほど図太くは無いいし、厚顔無恥でありたく無い』

以前、真剣な表情でそう語った彼。

その彼に対し、本気で勝負を挑み、彼はそれを正面から受け取って、私に敗北を突きつけた。虚を突かれて、訳もわからず敗北した。魔弾の射手、第3幕、第6場、第15番、狩人の合唱。それを歌いながら、猟銃を小手先で弄ぶ様子は、まるで指揮者のようであった。

たった一週間、たった数回の訓練であそこまで上手くなるのか。だとしたら彼は天才なのかもしれない。私が何年も掛けてたどり着いた場所に、彼はもう手を掛けている。

それでも私は諦めない。彼が天才だとしても、私は私。初心に還り、もう一度亡き母に誓おう。

私、セシリア・オルコットは家名と私自身の誇りに掛けて、国家代表になってみせます。

今は泣いてる暇なんて無い。そう拳を握り直すと布団から飛び起きた。

その後、オルコットは食堂に向かおうとしたが、すでに営業は終了しており、ルームメイトから簡易携帯食料を譲ってもらったことになった。

06 - 風の通り道

思慮分別は人生を安全にはするが、往々にして幸せにはしない。

『怠け者』

ノックの音を聞いてドアを開けると、そこには見覚えの無い女の子が立っていたと織斑秋二は認識する。随分と袖の余った制服を着ているが、物腰の柔らかい雰囲気と相まって、不思議と似合っていた。態々ここを訪ねてきたということは、更識に用があつてきたのだろうか？ そうなのだとしたら残念ながら今は席を外している。

「あー、更識に用だったら、今はいないから、また今度にしてくれないか」

「えーっと、かんちゃんにじゃなくてしゅーちに用があつてきたんだよー」

間延びした声で言う、しゅーちゃんというのは俺のことなのだろうか？ 他にいないのだからそういうことになるのだが、まあそんなことはいい。しかし、彼女とは初対面だったはずなのだが、何の用だろう。

「織斑秋二のことなら私のことですが、何か用ですか？」

「やっぱりそうかー。おりむーとそっくりだもんね。それでね、

おりむーのクラス代表就任パーティーするんだけど来れないかな？」

「遠慮しておきます」

短くそう言ってから、このまま返すのもあれなので「寄って行ったらどうですか？ お茶ぐらいは出しますよ」と彼女を促す。返事をして彼女はきよるきよる部屋を見回しながら進んでいく。

インスタントの紅茶を淹れて彼女に差し出す。俺が一口飲むのを見て、彼女も不機嫌そうに紅茶を啜った。

「むー、しゅーちゃんはどうして行きたくないの？ おりむーと仲間くないの？」

顔を上げて彼女の顔を見ると頬を膨らませて、如何にも怒ってますという表情をしている。それを見て、俺は頬を掻きながら「面倒なことは嫌いでね」と答えた。一夏との仲は悪くは無い。それでも双子はいつでも揃って仲良しこよし、なんて振舞うのは流石に勘弁だ。自分自身、他人に合わせることは苦手な人間だと自覚している。「この間の試合のせいで目立ってしまったね。暫くは引きこもってようと決めたんだ」

そういった後、思い出したように「それに二組の代表でもあるしね」と付け加えた。それを聞いた彼女は「そっかー」と言って天を仰ぐと、テーブルに突っ伏した。テーブルに身体を預けてこちらにダルそうな目を向ける。

「しゅーちゃんが来たら皆喜ぶと思うのになー」
とろんとした眼で見つめてくる彼女から、ふいと目をそらした。紅茶をまた口に運びながら、そういえばと思う。

彼女は更識のことをかんちゃんと呼んでいたことから知り合い、おそらく友人関係であることは想像に難くない。それならばと紅茶を置いて口を開く。

「それなら更識の奴を連れて行ってくれないか？ ここ最近悩み事があるみたいだからさ」

そのことに気が付いたのは試合の日。あの時、部屋に戻ってきてからずっと、落ち着きがないというか、うわの空というか、そんな感じだった。

呆気に取られているのか、瞬きを繰り返す彼女に付け加えて言う。「でも、その悩みの種と顔を合わせるの嫌かもしれない」
ため息を吐いてから、紅茶の残りを啣る。

彼女が余所余所しい態度を取る様になったのは、その次の日からだった。なんとなく遠慮しているような所は、元から見受けられたが、ここ最近はあからさまに顔を背けることも多くなった。どうし

てかを考えるには切片が少ないが、何が原因なのかはハッキリしている。

それは俺が一夏にあるのだろう。もしくは両方か。どちらにしろ同じ顔をしている以上、その顔とだぶってしまうのは当然といえるかもしれない。

飲み終えたカップをソーサーに乗せて彼女を見据えると、彼女は驚いたような顔で、口を少々だらしなく開けていた。そして、ぼそぼそと声を出す。

「……………気付いてたんだ」

「気付きもするさ。同じ部屋で生活しているわけだからね。ちょっとした気分転換にでもなればいいと思ったんだけど、やめといった方がいいかな？」

「誘ってみるよ。ありがとねしゅーちん、かんちゃんのこと思っ
てくれて」

そういつて彼女は微笑んだ。初め、誘いを断ったときに顔を膨らましていたのとは大違いだ。

それに対して「気にしなくていい」というと、彼女は紅茶を一気に飲み干して、部屋から出て行った。一度ドアを閉めてから、彼女はまたドアを開けて一言だけ言って去っていった。

「かんちゃんもクラス代表なんだけどねー」

去り際に皮肉を言っていく辺り、律儀なものだと感心する。表情豊かな人だとは思ったが、なかなか芸も細かいらしい。不意に口角が釣り上がるのを感じてから、あることに気が付いた。

彼女の名前、聞いてないや。

本音に会った瞬間に全身に悪寒が駆け巡ったことを更識簪は覚えている。私の数少ない友人の一人で従者でもある彼女との付き合い

は長い。その為か、彼女が悪巧みをしているときの顔は良く分かるのだ。

のほほんとした温和な表情の裏に隠した小悪魔の微笑を、私は確かに認識することが出来る。

しかし、わかったからといって回避できたことが無い。いつもいつも、彼女に押し切られてしまう。

手を大きく振りながらパタパタと駆け寄る様子は犬のようにも見えたが、私にとっては悪戯好きな妖精のようであった。

「かんちゃん、パーティーだよ」

どんな言葉が来ても冷静に対処しようと思いついたときの出来事だった。要領の得ない台詞に対して、思考が停止しそうになるのを必死で動かす。

「何の？」

しかし、何が何だかわからなかった私は、あっという間に頭が回らなくなった。結局、口から出たのは疑問だけだった。そして、彼女の次の言葉で完全に思考は停止した。

「おりむーの就任パーティー」

本音は確か一組だった。おりむーというのは織斑一夏のことだろう。その名を聞くと胸の奥で何かがざわつくのがわかる。

完成間近で開発中止になった私の専用機。それが中止になったのは、織斑兄弟の専用機の研究に倉持技研が総力を結集しているからだという。それを聞いて、というより織斑兄弟に専用機が用意されるということを聞いたときから、私の心の中である感情が芽生えていた。

嫉妬。私は彼のことが羨ましかった。

ルームメイトである織斑秋二は勤勉な人だった。初日からISの訓練を始めようとISの使用申請をしたり、参考書を熟読し、またネットでも情報収集をしていた。だからといって、四六時中ずっとISに関することをしているわけではなく、時間を見て読書をした

り、私のことを気に掛けてくれる気さくな人だった。

私にとって初めての男の友達。大人しい印象とは裏腹に、時折子供のような顔を見せる彼。

そんな彼を羨ましいと思つてしまった。そのことは私の行動の端々に如実に出ていたが、彼はいつも通りに私に話しかけてくれた。

嬉しくなかったと言えば嘘になる。それでも私はそつけない態度を取つて欲しかった。矛盾した願望が私の中で渦巻いていた。

物語の主人公のような彼。私もそんな風に思つていた。しかし、彼はそれを否定した。

それは『どうしてそんなに頑張るの?』と聞いたときのことだった。彼は『オルコットにも似たようなことを言つたんだが』と断つてから、真つ直ぐな眼をしてこう言つた。

『私が今ここにいるということは、本来ここにいるはずだった人間を私は何の努力もなしに踏みにじつたようなものだ。私は言わば略奪者だ。だからこそ、私は努力を惜しむわけにはいかない』
略奪者と卑下する彼に向かつて『そうじゃない!』と叫んでしまった。目の前の彼も呆気にとられているようだった。

あの時、彼に言つた台詞は確か『秋二君は悪くない』だったはずだ。これだけは確信を持つていえる。

誰かの為に声を荒げるなんて初めてのことだった。

それを聞いた彼はばつの悪そうに頬を掻きながら『ありがとう』とはにかんだ。

よくよく考えれば誰かに対して嫉妬したのは初めてかもしれない。姉さんのことは凄いと思う。でも、不思議と嫉妬したことは無かった。それが純粋な憧れからだったのか、もうすでに敵わないと諦めていたからかは自分でも良く分からない。そのどちらの感情も自分の中には確かにあるから。

初めて出来ただだの友達。初めて感情を露にしたのも彼。

織斑秋二は私の初めてをどんどん奪つていくなと思つた。その次

の瞬間、顔がかつと赤くなるのを感じた。

隣から意地悪な顔で「どうしたの？」と声を掛けられて、私は咄嗟に逃げ出した。

しかし、その後捕まえられて、そのまま引きづられるように着いて行った。

のほほんさんが「私がしゅーちんを連れてくるよー」と言って、帰ってきたときに隣に居たのは更識さんだったと織斑一夏は天を仰いだ。俺が行けばよかったと思う反面、俺が行っても、面倒だとか言って、来なかったような気もする。

しかし、これでめでたく周囲の注目を一身に受けることになった。慣れたといってもこれはきつい。元々、今回のパーティーの主役が俺なのだから仕方ないといえは仕方ない。

なんとなく答えはわかっているが、念のためのほほんさんに確認してみる。

「秋二は？」

「しゅーちん？ めんどくさいからパスだつて」

わかっていた事とはいえ期待していないわけではなかった。しかし、面倒くさいからという理由は素直すぎる気がする。嘘を吐いて欲しいというわけじゃないが、双子の兄弟なんだしこんなときくらい一緒にいてくれてもいいのと思う。それに、この間の試合の事とかも聞きたいし。

もうすでに、なし崩しに始まっているパーティーであったが、仕切りなおしということで改めて乾杯の音頭をさせられた。でも俺に気の利いた挨拶とかは期待しないで欲しい。周りの物足りなそうな眼が痛い。

手元においてあった紙コップに手を掛ける。中身は市販品の炭酸飲料だったが、渴いた喉にはよく効いた。

咽返りそうになったが、何とか堪えて、辺りを見渡すと、箒とセシリアが口論しているのが見えた。この間からずつとあんな感じだけど、仲が良さそうで安心した。箒は愛想が無いからクラスメイトと上手くやっついていけるか心配だったが、どうやら杞憂だったようだ。満足そうに頷いてから、もう一度コップを呷った。そして、今度は完全に咽た。

「おりむー大丈夫？」

「咽ただけだから大丈夫」

そう尋ねてくるのはほんさんの隣には秋二のルームメイトだという更識さんがいる。秋二ってどんな生活しているんだろうか。今まで同じ家で暮らしてきたのだから、ある程度は予想がつくが、寮生活は今までと勝手が違う。その所を更識さんに聞いてみることにした。

「えーつと更識さん？」

「な、なんででしょう？」

「いや、秋二って部屋ではどんな様子なのかなって思って」

そう聞いた途端、辺りが騒然とする。

「更識さんって弟くんと同じ部屋なの!？」

「ずるいなー。私と変わってよー」

「寝顔とかどんななの？」

「聞かせて、聞かせて？」

俺の一言で一組の皆が更識さんに群がっていく。それに驚いた彼女は、全力疾走で逃げていった。

俺は女子の反応のよさに啞然とし、何も聞けなかったと呆然となった。

その勢いのまま、俺の所に秋二の質問が殺到し、根掘り葉掘り聞かれてしまった。後日一夏はそのことで秋二にこっぴどく絞られた。

07・ラフ・メイカー

喜びには悩みが、悩みには喜びがなくてはならない。

『ファウスト』

週が明けて学校に登校すると、クラスでは転校生が来るという話題でもちきりだった。その喧騒に織斑秋二は辟易した。

なんでも中国の代表候補生が二組に転入してくるらしい。こんな時期に変なものだと思わずにはいられないが、そんなことよりも転入生が来るという事実の方が興味深いらしい。

「ねえねえ秋二くん、転校生ってどんな子かな？」

「どうだろうね？ まあ、すぐにわかるだろうけど」

そう言って諸手を上げてみせるが、お構いなしに次から次へと捲くし立てていくクラスメイト達に若干うんざりした。

その後も騒がしかったが、その騒ぎも隣のクラスから聞こえてくる叫び声で静まった。

「んなっ・・・!!? 何てこと言うのよアンタは!!!」

非常に聞き覚えのある声がある。ホンの一、二年前に聞いたきりの、耳によく響く声だ。この声の主が転入生の正体というなら、面倒なことになりそうな気がする。

ため息を吐きながら入り口を見ると、佐藤先生がちょこんと顔を出している。一組の喧騒に目をやっているのだろう。そんなことをしていると、姉さんに叩かれるぞ。

そんなことを思っていると、佐藤先生に出席簿という鉄槌が下った。

その後、頭を抱えた二人が教室に入ってくる。一人はこのクラス

の担任である、佐藤詩織、もう一人はおそらく転入生なのであろう、数年ぶりに会う友人、鳳鈴音。

二人が頭を撫でながら入ってくる姿を冷めた目で眺めていたと自覚している。だから、目が逢った彼女が大声で捲くし立ててきたことは当然だったかもしれない。

「ちよつと、秋二！ 黙ってないでなんか言いなさいよ！！」

その声にふいと顔を背けるが、些か失敗だったかもしれない。背後では、また喧騒がよみがえっている。

それに気付かない振りをしてしながら、目の前で行われる友人の自己紹介を眺めた。時折こつちを睨んできたが、可愛いものだ。

授業が終わった瞬間に、馴染みの友人のところへ鳳鈴音は駆け出した。

「秋二？ 無視するとはいい度胸じゃない」

「久しぶりだな、ドルバツキー。元気にしてたか？」

「ドルバツキーって言うな！ まあ、見ての通りぴんぴんしてるわ」

「しぶといのはお互い様だね」

そう言って二人で笑い合う。こうして笑い合うのも数年ぶりになるのかと思うと懐かしいものだ。

織斑兄弟と出会ったのは数年前。中国からの留学生として日本にやってきたあたしはクラスで浮いた存在だった。自分も自覚していたが、愛想が無い子供であった為、あたしは更に孤立した。

そんな私に手を差し伸べてくれたのが一夏だった。元より優しい性分なのか、織斑一夏は誰にでも優しくした。それは私にも適応したのか、初対面のあたしに対しても人懐こい笑みを浮かべていた。

そして、その後ろに秋二はいた。興味のなさそうな様子で本を片

手に一夏の後ろにいた彼は、初対面の私に向かって『・・・ネコ？』と呟いた。

それを聞いてあたしは秋二に向かって飛び掛った。が、またも興味のなさそうに首根っこを捕まえられて放り投げられた。

床に転がるあたしに一夏が『大丈夫か？』と言って手を貸してくれた。

これがあたし達の出会い。それから、あたしはよく笑う様になった。友達も増え、両親の不和も気に留めなくなった。

「ええつと・・・、秋二くんの知り合いなの？」

そう言われて意識を戻すとあたしと秋二の周りをグルッと囲むようにクラスメイトが立っていた。目の前の男の態度に気を取られて気にも留めなかったが、注目的になつていたようだ。

答えようとした私よりも先に秋二が声を挟む。

「ドルバツキーは私の友人だよ」

「ドル・・・バツキー？」

「ドルバツキーって言うなって言ってるんでしょうが!!」

「ドルバツキーっていうのはこいつの渾名だ。近所にすむネコに似ていたモンでさ」

うるたえるクラスメイトに得意気にそう言う秋二にむかつて、拳を振るったのはあたしのせいではない筈だ。

わりと本気で殴ったというのにこの男は大した事も無いように払いのける。避けながら回りに「ネコっばいだろ？」と聞く様子にまた腹が立った。

でもそのお蔭で、クラスにはすぐ溶け込めた。

認めたくは無けれど、秋二のお蔭だ。認めたくない、認めたくないけど、いつもいつもそうやって気を使ってくれる。あたしにとって織斑秋二はそんな男だった。

昼になつて昼食に一夏と秋二を誘つて行こうと思つたが、まず秋二に声をかけたら「先約がある」と言つてどこかに行つてしまった。仕方なく一夏だけ誘つと喜んで付き合つてくれた。何だかよくわからない二人が隠れながら付いて来たが、一体何なのだろう。

「いやー、まさか鈴がくるなんて思わなかつたよ。それにしても久しぶりだな」

「ま、まあ、そうね、久しぶり。秋二にも会つたわよ。二人とも相変わらずみたいね」

久しぶりに会つてもこの男は変わらない。ほんの少し顔が熱くなる。それを振り払うように足を速めた。

「早くしないと置いてくわよ」

「待てつて、鈴」

そう言つてあたしは笑顔で駆け出した。

遠くに見える織斑秋二の姿に向かつて大きく手を振ると、彼が面倒臭そうに手を上げて合図したのを見て更識楯無は満足した。

正直に言つてしまうと、彼がこの場にきてくれるなんて思いもしなかつた。そのことにちよつと顔が綻ぶ。

不機嫌そうなのは誘い方が悪かつたせいだと思つたが、態々足を運んでくれるなんて律儀おもしういな人。

態々ここまで来てくれた彼は、態々私の隣に腰を下ろした。真正面から顔を見たくないという意趣返しだろうか。

「初めまして、織斑秋二君。私は更識楯無と言つたの。よろしくね」
そう言つて笑顔で微笑みかけるが、それを気にも掛けずに「初めまして」とだけ彼は言つて、持ってきた昼食に手を掛ける。

彼の噂はよく知つている。ISを使える二人目の男性で、つい先日には、一学年の主席であるセシリア・オルコットを下している。そして私のかわいい妹の同棲（勘違い）相手でもある。

初め聞いたときはどうやって消してやるうかと考えていたものが、今では幸運だったんだと確信が持てる。彼と会ってから、ちゃんとはよく笑うようになった。私の前では見せないけれど、人見知りだった彼女がここまで変わるとは思いもしなかった。だから、ちよつとだけ羨ましい。

左に顔を向けると麻婆豆腐を片手に、天井を頬張っている秋二君がいた。偏食家だと聞いていたが、これほどだとは思わなかった。

「ねえ、秋二君、もう少し食事のバランスとか考えたらどう？」
そう聞くと彼はキョトンとした顔を一瞬見せると、次の瞬間笑い出した。

「ははははは、何だかんだ言っつてやっぱり姉妹なんですね。簪も同じ事を言っつてましたよ。まあ、直す気はありませんけどね」

笑った彼の横顔からは不機嫌そうなものは見受けられなかった。妹と同じだという彼の言葉が嬉しかったのは秘密だ。

「それより、今日呼んだのは何故ですか？」
「特に何も無いよ。強いて言うなら、君の顔が見たかったからかな」

「それであんなモノ送ってきたんですか？」
「気に入ってくれた？」

彼があんなモノというのは恋文を模した招待状のことだろう。意表をついてみたのだが、彼はどんな反応をしたのだろうか。

見た瞬間に顔を赤くして恥ずかしがったり、はないな。うん、絶対がない。どちらかと言うと、冷めた目で一瞥してからゴミ箱に放り投げそうだった。

「次やったら、真に受けますからね」
そう言う彼の横顔にドキリとしてしまったのは秘密だ。

「それじゃ、私はお先に失礼しようかな」
食べ終えてまとめた食器を抱えて、内心が零れ落ちないうちに、その場から立ち去った。

一方その頃、一夏の方は女性三人が血で血を洗うような洗わないような修羅場を展開していた。それを見かけた秋二は何も見なかったことにして、見つからないように細心の注意を払いつつ逃げ出した。

恋は決闘です。右を見たり、左を見たりしていたら敗北です。

『魅せられたる魂』

学園内の廊下を安全歩行していたら後ろから撥ねられたと織斑秋二は理解する。ぶつかったのは自分より一回りも二回りも小さい少女だった。腰の鈍痛に顔をしかめながら、倒れこんでいるリンを引き上げる。

「走る時はちゃんと前見ろって言ったろ」

起き上がらせてやったリンは顔を背けて何も言わない。しかし、目が赤く腫れているのはよく見えた。滅多な事で泣かないこいつが泣くとなると、一夏絡みか？

こうなると何を言っただって聞きやしない。だからといって、このまま放り投げるわけにもいかないし、今の状況を傍から見たら、俺が泣かせたように見えることだろう。

どうしようかとほんの数瞬悩んだが、すぐに止めた。女の事についてとやかく悩んでも何もわかりはしない。それよりも、信頼の置ける人に丸投げしてしまっただほうがいいかもしれない。そう思った俺は、リンの首根っこを引っ掴むと、引き摺るように歩き出した。

「ちよつと、秋二！？ 放しなさいよ！ 放せ！ 放せって言うてんでしょ！！」

「嫌だ」

「あたしの事なんて、放っておいてよ！」

「安心しろ。元からそのつもりだ」

「…へ？」

「着いたな」

リンが泣きわめいて五月蠅かったせいで、周りから白い目で見られたが、気にしないことにする。

リンを引き摺って来たのは俺の部屋。正確には俺と簪の部屋。そのドアの前に立って、ノックをして中に人がいることを確認すると、部屋の中にリンを放り込んだ。

「そういうことで、後は任せた」

そう言うだけ言って、返事も聞かずにドアを閉めた。まあ、簪なら問題ないだろう。

ドアの向こうから何か叫んでいる声が聞こえるが、それだけの元気があれば問題ないだろう。

帰りに缶ジュースでも買って行ってやるうかと思いつながら、口笛交じりに俺は部屋から離れていった。

どうしたらいいのだろうか？ 突然起きた、現在の状況に更識簪は呆然とした。目の前には秋二君が攫って来た名前も顔も知らない女の子。攫って来たというのは多少語弊があるけれど、今の状況を考えれば、その言い回しの方がしっくりくる。

でも、本当にどうしたらいいのだろうか？ 自分で言うものでもないが、私は社交性が低い。人見知りの私が初対面の人にどう話しかければいいかなんてわかるはずもない。

さらに付け加えて言えば、彼女は泣いている。

何故泣いているのか聞いたほうがいいのだろうか？

名前を先に聞くほうが無難かな？

それよりも何故秋二君は彼女をここに連れてきたのだろうかという疑問が浮かぶ。彼が『任せた』と言ったのだから、彼自身が何かするためにここに連れてきたわけではないはずだ。となると私がどうにかしないといけない訳で……。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙がこんなに辛いものだとは知らなかった。一人でいるときには感じられない息遣いや心音がやけに大きく感じる。

でも、挫けるわけにはいかない。秋二君が『任せた』と言ったんだ。頑張ってみよう。一步踏み出して、勇気を出して、手を伸ばすんだ。

「は、初めまして、私、更識簪って言います。あなたの名前は？」

「……鳳鈴音」

「ええっと、私でよかったです話を聞きますよ」

「……………」

初対面の人に相談しようなんて思わないよね、普通。でも、諦めないよ私。

相手が心を開いてくれないのなら、まずこちらから。

「リンちゃんは秋二君の知り合いなんですか？」

そう聞くと彼女は口を開かずに、ただ頷いた。

「そうなんですか。あの人は凄いですよね。努力を惜しまない人で、いつも自分に自信を持ってる。私とは大違い」

微動だにしない彼女は私の言葉に耳を傾けているのか、それとも無視しているのかはわからない。それでも話を続ける。

「私はいつも逃げてばかりいました。何かに言い訳して、悪いこととは他の誰かのせいにして、自分が傷つかないように生きてきました。それじゃいけない。もっと頑張らなきゃって思っても、辛いことから目を背けていたんです」

彼女の方は見ずに、天井を見上げながら話を続ける。聞いてなんかいないかもしれない。そう思っても不思議と舌が止まる事はなかった。

「そんな私に秋二君はこう言ってくれたんですよ。『逃げたっていいんじゃないかな。大人はよく立ち向かえて言うけど、逃げる

ことは悪いことじゃない。疲れたら立ち止まってみればいい。そうして見えるものもきつとあるはずだから。だから俺が大事だと思っ
のは認めること。立ち向かった自分も、逃げてしまった自分も、成
功した自分も、失敗した自分も、全部受け止めて忘れないこと。無
駄なことなんて一つも無い。そう考えればどんな選択だって認めら
れる』って。それを聞いて、私泣いちゃってね。あの時の秋二君の
顔は面白かったな」

そう言い終えて、顔を恐る恐る下げてみる。そこにはさっきまで
とは別人のような目をした彼女がいた。その目を見て、私のしたこ
とは無駄ではなかったのだと胸が熱くなった。

「アンタは秋二と仲いいのね」

笑顔でそう聞くリンちゃんに、それよりもいい笑顔で「はい」と
答えた。それに「そっか」と頷いた後、ゆっくりと話し始めた。

「あたし、約束したのよ。大事な、ホントに大事な約束。少なく
ともあたしにとっては大事な約束だった。でも、アイツにとっては
どうでもいいようなことだったのかな？ 覚えてないならよかった。
子供の頃の約束だから、覚えてないなら思い出させてやればいいだ
けだし。でも、アイツは覚えてたの。覚えてたくせに、何にもわか
ってなかった…」

ぼそぼそと言葉を繋ぐ彼女の目尻から雫が落ちる。それをごしご
しと袖で拭おうとしていたので、私はポケットからハンカチを取り
出して、彼女に手渡した。彼女は「ありがとう」と鼻声で言うのとハン
カチを顔に押し付けた。その間、私はリンちゃんの背中をさすって
いた。

「だあーーーーー！！ もう止め！！」

そう叫び声を上げて鳳鈴音は飛び起きた。隣に居た更識は驚いた
ような顔でこちらを見ている。まあ、さっきまで泣いていた人間が

いきなり叫び出せば無理もない。

「ありがとね更識。お蔭ですつきりしたわ」

「簪でいいよ。更識だとお姉ちゃんと被っちゃうし。リンちゃん
のことはリンちゃんって呼んでいいかな？」

「うん、よろしくね簪」

そう言つとどちらからともなく右手を差し出した。

目の前の彼女は笑っている。私も目を真つ赤に腫らしてはいるだ
ろうが、心の底から笑っている。悩んでいたのが馬鹿らしくなっ
てきた。

「そうよ。一夏の馬鹿なんてぶつ飛ばしちゃえばいいのよ。叩き
のめして、地べたに這い蹲らせて「ごめんなさい」って謝らせれば
いいのよ。どうしてこんな事を悩んでいたのよ」

あたしが大声で笑うのを、簪は呆然と見つめていた。

「ああ、でも、そうなるとやっぱり秋二に代表代わってもらわな
いと」

「呼んだか？」

「ひゃい!？」

「きゃ!？」

急に耳元で声があったのに驚いて変な声が出た。簪も同じだったら
しい。それが面白かったのか、秋二は腹を抱えて笑うのを必死に堪
えている。

飛び掛ろうとする前に秋二が一枚の紙を差し出した。その紙には
達筆で『辞める 織斑秋二』とだけ書いてあった。

「それを佐藤先生のところを持って行って、変更よろしくって言
えば代えてくれるらしい」

「準備がいいじゃん」

「どうやってリンに押し付けようかずっと考えていたからな。そ
ちが乗り気なら好都合だ。あ、それとこれはお土産」

土産といって差し出したのは缶ジュースだった。その内のアップ
ルジュースを簪に、オレンジジュースを私に手渡すと、本人は残っ

た炭酸飲料を手にとった。

あたしは小気味いい音と共に缶を開けて中身を呷った。簪は大人しそうな見た目の通りにちびちびと少しずつ飲んでいるが、秋二はもう飲み干していた。三五缶とはいえ、一気に飲み干したこの男はケロリとしている。

秋二は飲み干した缶をゴミ箱に放り込んでから話し始めた。

「やつぱり女子のことは女子に任せるに限るね。簪もご苦労様。急なことで驚いたろ」

「驚いたよ、本当に。どうしたらいいか全然わからなかったし」

「それでも、リンがこうして笑っているのはお前のお蔭だぞ」

「そ、そうかな？」

何だかこの二人、見ているといるところろんなところがむずむずしてくる。そんな二人は置いてあたしは教務室へ向かうことにした。

「じゃあね、二人とも。また来るわ」

「またね、リンちゃん」

「またな、ドルバッキー」

「だから、ドルバッキーって言うなっつってんでしょ!!」

そんなあたしの顔は朝と同じ笑顔だった。

後日、『織斑一夏肅清委員会（仮）』がこの部屋で執り行われることとなった。委員長、鳳鈴音。副委員長、更識簪。書記、織斑秋二。議題は『如何にして織斑一夏を這い蹲らせるか』という何とも殺伐とした会議になったが、皆終始笑顔で、特に簪の満面の笑みは、委員長をして「あの子怖い」と言わせるほどだったという。

09・暴いておやりよドルバツキー

自分の限界を知る者こそ自由な者である。自分を自由だと妄想する者は、その妄想の奴隷である。

『リブツサ』

ついに一夏をこの手で叩きのめせるのだと実感すると、鳳鈴音は心が躍った。ピットの中で試合が始まるのを今か今かと待ちわびている。

ピットの中には、相変わらず皺の消えていないスーツを着た、担任の佐藤先生と、元クラス代表の秋二しかいない。簪は一応四組の代表であることから、この場にはいない。

「リン、楽しみなのはわかったから、少し落ち着け。とりあえず、昨日のおさらいしておくか？」

「そうね、ちょっと肩に力入りすぎてたかも。やるからには徹底的にね」

あたしがそう言うと彼は頷いてから、ゆったりと話し始めた。

「まずは、基本的な戦闘だが、衝撃砲は使わずに近接格闘のみだ。試しに一発撃ってやるのはいいが、ここは敢えて一夏の土俵で勝負する」

「それで最後は白式の零落白夜を真正面から叩き潰す」

『織斑一夏粛清委員会』で話し合った結果、機体の相性を駆使して”勝ち”にいくのではなく、小細工抜きで一夏を叩くことに決まった。

敢えて、刀一本しか持たない相手に衝撃砲を使わないのはそのためだ。そして、一夏の切り札とも言える単一仕様、零落白夜を使わせた上で、撃墜する。

この案は簪が考えたものである。『どうせなら、一瞬勝ちを見せ
てから、落とせばいいんじゃないかな?』と言って笑顔で微笑んで
いた。期待を持たせてそれを奪うというやり方に、あたしも秋二も
大いに賛成した。

「あんた等、ちょっと怖いって。特に秋二君は凄く鬼畜な顔して
る」

頭を掻きながら言う佐藤先生の言葉を聞いて、顔を上げてみると
先生の言う通りの顔をした秋二がいた。言われた本人は気にも留め
ていないのか、全く表情を変えない。

それを見た佐藤先生が深いため息を吐くと、ピットの中に、試合
の準備が整ったことを告げる連絡が入った。それを聞いたあたしは
意気揚々と相棒に乗り込む。

相棒の名は『甲龍』。中国の代表候補生になったあたしの専用機。
「頑張ってね、鈴ちゃん」

佐藤先生のエールを受け取る。

「一夏の方も何か隠し玉があるかもしれないんだ。気を付けるよ」
「当然！ 油断も容赦も慈悲も同情も全部梱包して実家に送って
おいたわ！」

秋二の忠告は言われるまでもない。今回の試合はあたしが望んだ
もの。妥協も慢心もそこには存在しない。

地に這い蹲って謝らせてあげるわよ、一夏^{ほか}。

真っ直ぐ前を見据えて、あたしは空へ飛び出した。

ピットから飛び出て行ったリンを見つめながら、これから始まる
試合のことを想像して、織斑秋二は悦に浸っていた。佐藤先生がこ
ちらをチラチラと見ているようだが、気にしない。

アリーナで一夏とリンが向かい合う。俺はそれをピットに取り付けられたモニターで確認する。

『手加減なんてしないで本気で来いよ』

『…はっ』

一夏の台詞を鼻で笑うリン。凄くいい笑顔をしている。この間の泣き顔とは大違いだ。

それに対して一夏は無然としている。

『そうやって余裕でいられるのも今の内だぞ。その天狗の鼻へし折ってやるよ』

リンの態度を侮りと捉えている一夏に勝ちは無いかな。いや、価値がないのか？ まあそんなことはいい。

『結構な自信じゃない。相当、練習してきたの？』

『当たり前だ』

『土下座の』

『違いよ！！』

相変わらず漫才の上手い二人だ。俺もあんな相方が欲しいものだが、どっかにいないものかな？ 会長とかあの時の『妖怪袖ぶらぶら』（命名俺）とか有望そうなんだけど、どうだろう。

「ねー、秋二君？ もう少しで始まりそうだから戻ってきてくれる？」

そう言われてぼーっとしていた事に気が付く。モニターに目を向けると今にも始まりそうな様相を呈していた。

試合開始を告げると共に白式が吹き飛んだ。おそらく衝撃砲で吹き飛ばしたのだろう。

『何が起きたかわかんないって顔してるわね。これは衝撃砲って言うてね、頭悪いアンタにわかりやすく言うと、見えない弾丸ってところかな？ でも、安心しなさい。使うのはこれっきりだから』

『手加減のつもりか！？』

『手加減？ 何を勘違いしてるかわかんないけど、あたし言ったわよね。アンタを徹底的にぶっ潰すって、コテンパンに叩きのめし

て、地面に這い蹲らせてやるって。だから、態々アンタの土俵に立って、自信とか尊厳とか全部踏みじるって決めたの』

いい顔してるな本当に。隣の佐藤先生なんてかなり引いてるぞ。今これを見る生徒が何を考えてるかなんて、わからないが、大体が佐藤先生と同じ反応をしているんだろう。

これ以降リンが周りから白い目で見られるようになるのかと罪悪感が首をもたげたが、まあそんなことはいいか。

モニターの中ではリンが双天牙月とか言う大型の青龍刀二つで一夏を弄っていた。弄っているわけではないのだから、一夏が手も足も出ずに地面に叩きつけられているのを傍から見ていると、弄っているようにしか見えない。

『Stand up。まだまだ勝負はこれからよ』

一夏を追撃せずに悠然と待ち構える様子はまさに皇帝。このアリーナで、リンはまさしく王者だった。

『……そんな風に胸を張ったって、大きくなるわけじゃないぞ』
苦し紛れにリンが気にしている事を言っただけで挑発する。実力で劣る一夏がオルコットとともに試合が出来たのも相手が冷静さを欠いていたからである。

それを今回も実践しようというのだが、対策済みだ。

『ふーん、アンタがそんなこと言うんだ。お姉さんの身体にしか興味が無いくせに』

『なっ！？ そんな訳あるか！！』

『口を開けば』千冬姉』、二言目には『千冬姉』。一夏のピンク色の脳細胞の中は『千冬姉』のことで一杯だっただけで秋二が言っていたわよ。違うの？』

『違うに決まってるだろ！！』

『そうなんだ。可哀想な千冬さん、大事な弟に嫌われてしまっただけ……』

そう言っただけで、ヨヨヨと泣き真似をする。自分達が仕込みを入れておいたとはいえ、なかなかの演技派だな。

『き、嫌いだななんて言っただろ』

『じゃあ、秋二のいつてた通りなの？』

『いや、それは…』

『やっぱり嫌いなね』

『うづうづ……お、俺は……千冬姉が大好きだー！ー！ー！ー！』

その言葉を聞いて俺はピットの中で大声を出して笑った。笑いきて、息が出来なくなるほど笑った。全校生徒の前で愛の告白は恥ずかしくない。

俺が大声で笑っている中、観客席ではざわめきが収まらなかった。

目の前で悪人面した笑顔を振りまく自分の生徒を見ながら、佐藤詩織は天を仰いだ。

こんなのがウチのクラスの代表でいいんだろうか？ 実力は十分あるし、思慮分別もある。

だがしかし、今、目の前で高笑いをしている少年は人としてどうなのだろう。個人的には外見も性格も凄く好みなのだが、客観的に見るとあら不思議、悪者にしか見えない。

アリーナで戦っている彼女も、意地っ張りな可愛い少女だと思っていたが、公衆の面前で幼馴染を辱めて満足そうな顔をしている。

そういう間柄なのだろうという憶測を入れても、悪役だ。悪役には見えない。

モニターの中では二機のISが睨めっこをしていた。

『さつさと本気出さないよ。切り札があるんでしょ』

『うるせー！ 黙ってる！』

『出し惜しみして勝てると思ってるなら、構わないけど』

そう言った鈴ちゃんに対して、一夏君は雪片式型を下段に構える。

目の色も少し変わったように見える。

『謝るのはそっちの方だぞ、鈴』

『来なさい。受けて立ってあげる』

二人の間の空気が変わる。それを感じ取ったのか、生徒達のざわめきも収まっていく。

そして、数秒間の読み合いを経て白式が甲龍の懐に入り込んだ。

イクニッション・ブースト

瞬時加速という技術がある。ISの後部スラスタ翼からエネルギーを放出、その内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。

それを用いて白式は甲龍の懐バイタルエリアに潜り込んだ。

これは一本取られたか？ そう思った次の瞬間に、その考えは浅はかだったと思ひ知らされる。

甲龍に乗った鳳鈴音が取った行動は回避でも防御でもなかった。

前進。高速で接近する白式に自ら近づき、零落白夜の間合いから逃げるのではなく、完全に接触するくらいの距離まで詰め寄る。そのまま零落白夜を持つ右手を掴み、逆に懐に入り込むと肘を強かに打ち込んだ。

打ち込まれた一夏君は堪らず、壁に打ち付けられた。

甲龍を駆る鳳鈴音は、変わらずに悠然と虚空に立つ。

頂心肘というのだろうか？ 漫画で読んだ程度の知識しかない私は曖昧に理解する。

王者は地面に落ちた小鳥を手招きする。それを見た勇者はもう一度剣を握り締める。

もう勝負は付いている。頼みの切り札ジョーカーも破られた挑戦者には何の手段も残ってはいない。それでも彼は剣を手に取り立ち上がる。

ちょうどその時にアリーナが轟音と砂煙に包まれた。

煙が晴れた時、そこには三機のISがいた。一つは白式。機体の損傷も激しく、恐らくシールドエネルギーも残り僅かだろう。もう一つは甲龍。ほぼ無傷で、シールドエネルギーも殆ど減ってはいな

いはずだ。最後の一つは見たこともないIS。昔アニメで見たロボットのような不均一な姿。人型の黒い肢体から伸びる二つの大きな腕がそれを更に増長させた。肌を全く晒さないような全身装甲で、頑強というよりも不気味さの方が目立った。

『佐藤先生、襲撃です！ ただちに生徒達に避難を！』

無線から聞こえてきた織斑先生の声にはつとずる。襲撃という非日常の言葉に焦りが生まれる。普段、生臭な分こんな時くらいはしつかりしないと。

まずは、目の前の彼を逃がさねばならない。世界で二人しかいないISを使える男性というんだから、今回の襲撃の目標が彼らであるかもしれないということは、想像に難くない。一夏君はアリーナの中だし、織斑先生がどうにかするだろう。

そう思っただけの姿を確認すると、優雅にお茶を飲んでいた。

「何してんの、アンタ？」

「先生もいります？」

「そんなの後でいいから、まずは逃げるよ」

「大丈夫ですよ。いや、寧ろここでないといけない」

逃げると言っても彼の態度は変わらない。私の顔から疑問が滲み出していたようで、彼は指を一本立てて、まるで講義を開くかのよう説明を始めた。

「まず、今回の襲撃の目的について考えて行きましょうか。織斑一夏の誘拐だとすれば、態々こんな人目につくところではずがない。混乱に乗じて私を攫いに来たのだとしても同じことです。どこの国、どこの企業であろうと世界を敵に回してまで、たったの一人や二人を捕まえようなんてしません。暗殺が目的だったとしても同じことです。更に言えば、そんなことをするより、刺客が生徒に成りすまして潜り込んだ方が手っ取り早いです。情報収集なんてのは論外です。態々貴重なISを一機失ってまで、戦闘して情報を集める意味はありません」

一度区切って、紅茶を一口啜ってから話を続ける。

「今回の襲撃は愉快犯による犯行です。今回の襲撃に関して得をする人はいませんから。そしてISを自らの欲望のために掃いて捨てる人間は一人しかいません。ISのコアを自分の好きなときに、必要な分だけ使い捨てるなんてことが出来る人、篠ノ之束さんですよ」

「え？ でも彼女はISのコアはこれ以上作らないって…」

「誰かのために作ることはないでしょうね。でも今は違う。自分が知り合いにあげた玩具^{IS}がどんな風になっているかが、気になってしょうがないんでしょう。だから何も問題はありません」

「そっぴい終えると彼は大きく伸びをした。」

彼は飲み終えた空き缶を指先で回しながら、ピット内を見渡している。恐らくゴミ箱を探しているのだろうが、生憎ピットの中にゴミ箱はない。そもそもここは飲食禁止だ。注意してやろうかと思っただころに「そう言えば」と思い出したように秋二君が声を上げる。

「彼女が上げた玩具は全部で二つですから」

「そう呟くと彼は専用IS、呉葉を展開した。それとほぼ同時に巨大な砲台のような武器を展開し始める。」

ピット内で何をと思う間もなく、ピットの中が揺れる。その直後に天井から、アリーナの中にいたISと同じ機体が現れた。

「こんにちは、死ね」

不吉な言葉を口にして秋二君は砲台のようなものを、正体不明ISに突きつけると、何の逡巡もなしに撃ち込んだ。号砲の音と共に敵ISが浮き上がる。彼はピット内にあつた近接用ブレードを引く掴み、敵ISを持ち上げると、あっという間にピットの中から飛び出した。

私は慌てて外に出る。外に出た私は悪魔のような男がいるのを認識した。

呉葉に乗った彼は、敵ISを掴んでアリーナのシールドに擦り付けていた。擦り付け、アサルトライフルやらガトリングガンやらを撃ち込みながら、高笑いする彼はまさしく悪魔のようだった。

擦り付け終わった敵ISの両腕を、近接用ブレードを使ってア
ーナの隔壁に釘付けにすると楽しそうに武装を展開した。

「AIMスフルオープンフルファイア
全武装展開、全弾発射」

武装を驚くほど速く展開したと思ったら、ものすごい火力が敵I
Sに降りかかった。

両腕にはアサルトライフル、その腰にはガトリングガンが唸りを
上げている。左肩にはミサイルポッドが乗っており、右肩には大砲
がくっ付いている。弾切れを起こすと両手に持っていたアサルトラ
イフルを戻し、代わりにハンドガンを展開した。しかし、それは使
わずに、砲撃を続ける。

一通り砲撃を終えるとそこにはISだったモノの残骸が残ってい
た。どう見ても壊しすぎだ。それを確認して、秋二君は武装を戻す。
しかし、ハンドガンは展開したままで、壊れたISに近づく。

彼はISの下までたどり着くと何の躊躇いもなく、その上に腰を
下ろした。あれだけ壊れていれば、まさかということにはならない
だろう。

そう思った矢先、彼の下のISが動きを見せる。それを秋二君に
知らせようと声を出す前に、彼のハンドガンが唸った。

「椅子が動くんじゃないよ」

そして、ISは完全に動かなくなった。

やっぱり悪魔だ、この子。それが鬼。絶対人類じゃない
って。

そう思った私の顔は人生で一番赤くなっていた。

佐藤詩織がほつたらかしてしまった生徒の誘導は、

山田麻耶が何とかした。また、織斑一夏も鳳鈴音も無事だった。よ
って今回の非常事態は、数人の生徒が軽傷を負ったというくらい
の小さな被害しかなかったが、佐藤先生は後日、織斑千冬にこつてり

怒られた。

10・ドラマチック生命体

喜劇で一番難しい役は愚か者の役であり、それを演ずる役者は愚か者ではない。

『ドン・キホーテ』

久方ぶりの帰宅だと織斑一夏は自覚する。IS学園から開放されて、羽を伸ばしている。

この間の試合のせいで、クラスメイトに白い目で見られたり、可哀想なものを見る目で見られたりして心が穏やかでなかったので、今日だけはISのことを忘れて、ゆっくりしよう。

あの試合のことで千冬姉から何も言われなかったのが、せめてもの救いだった。

それに何だかいつもより、千冬姉の態度が柔らかかったような気がした。

「久しぶりだなー。家に帰ってくるの」

「そうだな。とりあえずMP3プレーヤーだけは回収しないと」

「漫画とかゲームは？」

「いらないし、できない」

「そうだよなー」

これまでずっとIS学園で生活してきたが、千冬姉が必要最低限過ぎる荷物しか持ってきていかなかったため、今こうして回収に来ているのだが、正直言って嗜好品の類を持ち込んでも、それに割く時間がない。

家になると少し埃っぽい匂いがした。一月以上空けていたんだから、それも当然だろう。

秋二はさっさと自分の部屋に行ってしまった。俺も自分の荷物を

まとめることにしよう。

三十分足らずで俺達の回収作業は完了した。それだけ荷物が少ないということにため息が出る。

俺と違って秋二は終始笑顔だった。

「機嫌がいいみたいだな」

「そりゃ、そうだ。最近は音楽聴けてなかったからね」

秋二は音楽好きだ。洋楽邦楽問わず、クラシックからメタルまでいろんなジャンルの音楽を聴いている。

誰も知らないような曲を聴いてると思ったら、誰でも知っているような曲を知らなかったりという事が秋二にはよくある。

俺は子供みたくにはしゃぎながらイヤフォンをつける秋二を連れて家を出た。これから向かうのは中学時代の友達のところだ。隣を歩く秋二は俺の声が聞こえるように片方のイヤフォンを外している。

「弾の奴、元気にしてるかな。そーいや、秋二ってIS学園に行く時、説明してないんじゃないか？」

「ああ、いきなり連れてかれたからな。説明も何もしていない。

一夏の事が報道されたあたりで、なんとなく予想は付いたけど」

「そーなのか？」

「そうだよ」

秋二と話しながら、目的の場所に着いた。五反田食堂という看板の掲げられた暖簾を見ながら、その建物を回りこんで中に入る。

中に入ると俺の友達、五反田弾が待っていた。

「ひっさしぶりだな、一夏に秋二。まあ、とりあえず上がってけよ」

そう言う弾に付いて歩いていく。こうして三人でいるのも久しぶりだ。弾に案内されるまでもなく、慣れ親しんだ親友の部屋に上がりこむ。

この激動の数ヶ月を振り返ってみると随分大変だったものだ。

藍越学園の入試の会場を間違えたことから始まって、第との再会。

セシリアとの決闘。鈴とも再会して戦った。

そう思い返してみても、まだ秋二とは一度も戦ってないなと思いつつ。セシリアにも勝つてたし、やっぱり俺より強いんだろうな。

「秋二はやっぱすげえよな」

「何だ藪から棒に。気持ち悪いぞ」

「気持ち悪いとは何だよ。褒めてるんだぞ」

「お前に褒められても嬉しくねえよ」

「相変わらずだなお前ら。IS学園でもそんな感じだったのか？
いつもの様に素っ気無い態度で返す秋二にそれを傍から見ている弾。それはまさしく数ヶ月前の日常と同じだった。

「ああ、相変わらず一夏は節操なしだよ」

「節操なしって何だよ!？」

「違うのか？」

「あー、そうだよな。一夏は姉さん一筋だもんな。聞いてくれるか弾。こいつ、全校生徒の前で『俺は千冬姉が大好きだ!』って叫んだんだぜ。最高だよな全く」

「マジかよ!？ 元々そういう噂はあったけどよ」

「それは誤解だと言っててるだろ!!」

あの噂のせいで最近では減ってきた周囲の目がまた増えたんだぞ。

「お兄!! さつきからつつさいよ」

流石に騒ぎすぎたのか注意された。ドアを開けてところに立っていたのは弾の妹の五反田蘭。兄とは違い優等生の彼女は弾に対してきつく当たる事がよくあるが、きつと愛情の裏返しなんだろうと理解する。

「お邪魔してるよ」と言う秋二に続いて、俺も「久しぶり、邪魔してる」と声をかける。

「い、一夏さん!？ それに秋二さんも!？ ちょっとお兄、一夏さんが来るんだつたら前もって言っておいてって言ったじゃん」

「……………言つたぞ俺は」

「なら、ちゃんとこつち見なさいって」

詰め寄る蘭にたじろいで目を逸らす弾。俺らにも妹がいたらこんな感じだったんだろっか？

「蘭、それくらいにしておいてやってくれ。それよりもそろそろ昼時だ。一緒に食わないか？ 今なら一夏もおまけ付だ」

「ハッピーセットみたいに言っちなよ」

「ふん、秋二さんに感謝することですね。じゃあ、私は先に行ってます」

そう言う蘭は部屋から出て、階段を駆け下りて行った。転んだりしなきゃいいけど。

「俺らも行こうぜ」

そう言う秋二に続いて弾の部屋を後にした。

五反田食堂の方で昼飯を取ることにした俺達は四人でテーブルを囲んでいた。俺と蘭が並んで、その向かいに弾と秋二が座っている。「焼肉定食一つとラーメン一つ、それだから揚げと餃子も一つずつ」

目の前では俺達用に用意してもらった昼飯に追加で注文している秋二の姿があった。

俺も弾も、もちろん蘭も用意されたものだけで十分だ。昔から大食いではあったが、ここ最近それが目に見えて加速しているような気がする。この間学食であったときも、カツ丼と天井と牛丼を並べていた記憶がある。

「何ともまあ、相変わらずだな」

「ここの味が恋しくなってるね」

「残さず食うってんなら構わねえが」

苦言を漏らしながら、この食堂の店主、五反田巖さんが注文の品を作り始める。

もうすでに秋二の手元にある食器は空になるうとしていた。

「で、どうなのよ？ IS学園ってのはさ。」

「どうなのって言われてもな。どうなんだ、秋二？」

俺がそう聞くと秋二はわざとらしく咳払いをすると説明し始めた。

「織斑一夏君はクラスの皆さんと分け隔てなく交流していて、非常に社交的です。七年振りにあった幼馴染とも良好な関係を築いており、他にも中のよい女性はあるようです。少々折り合いをつけるのが苦手な面があり、意見の相違から不和が生じてしまうこともあります。持ち前の行動力で解決してしまいます。しかし、最近は少し環境に慣れてしまったのか、だらけているような点が見受けられます。って感じかな。以上織斑秋二講師による『よくわかる織斑一夏』のコーナーでした。というわけで、いただきます」

「どういうわけだお前……!!」

「間違っちゃいないだろう？ それと食事中に騒ぐな」

そう言いながらラーメンを啜り始める。正論なだけに反論できないし、秋二の言ってることが間違いというわけじゃないから余計に性質が悪い。更に、厨房では巖さんがお玉を振りかぶっていた。

「あの…、秋二さん？ 一夏さんって学園ではどんな感じなんですか？」

「まあ、蘭が知ってる通りだと思うよ。IS学園に行ったからって何かが変わる訳じゃないよ」

「そうですね…」

そう頷いてから、蘭は暫く俯いていたと思ったら、おずおずと顔を上げて、秋二に声をかけた。

「あの…、相談したいことがあるんですけど…、いいですか？」

蘭が相談するのは決まって秋二だ。それだけ懐かれているのか、弾は『俺よりも蘭の兄貴をやってるよ』とも言っていた。俺は未だに敬遠されがちだというのに。

「いいよ。俺が応えられる範囲でよければ、ならね」

それに「ありがとうございます」と頭を下げたから、蘭は切り出した。

「私、IS学園に入学しようと思うんです」

「なんだって!？」

「お兄は黙ってて」

秋二は考え込むように顎に手を添えながら、話し始めた。

「…正直に言っつて、お勧めはしない」

「私じゃ無理…ということですか？」

「無理と言っつんじゃない。寧ろ、蘭ならそこそこの操縦者になれると思うよ。自信を持ってここで相談してきたってことは、もう適正試験の結果もよかつたんだらう？」

「はい、A判定を貰いました。でも、どうして？ どうして秋二さんはお勧めしないっつて言っつんですか？」

「ふむ、理由はいろいろあるが、それは置いておこう。質問に質問で返すものじゃないんだが、蘭はISがどんなものだと思っつてる？」

そう聞かれた蘭は顔を下げ、数秒考え込むような仕草を見せた後、顔を上げて答える。

「ISは今この世界のあらゆる面で最も力のあるモノだと思っつす」

「そう思えるなら、一夏よりマシだね。ああ、文句は後で聞っつから今は黙っつてろ」

そう言われてしまえば、口を噤むしかない。

「その通りISというものがこの世界に与える影響は大きい。ISの操縦者になるなら、ゆくゆくは国家代表かその候補生、軍属になるということも不思議じゃない」

「私が危険な目に遭っつことを心配してくれてるんですか？ 私は大丈夫です」

「危険…か。そうじゃない、そうじゃないんだよ蘭。人は痛みには耐えられる。それは自分だけのもので自分だけは理解できるからでもISはそうじゃない。ISは操縦者の安全は保障する。だが、ISに対するものは違っつ。ISの前では戦闘機も戦車も紙切れ同然だ。ISの前では命が軽くなる。俺はね蘭、君に人殺しになっつてもらいたくはないんだよ」

その言葉を聞いて誰も声を出すことが出来なかった。蘭も、その兄の弾も、もちろん俺も。

不意に蘭の唇が震えたのが見えた。

「……………か？」

「……………」

「……………だめですか？」

「……………」

「一夏さんと、秋二さんと、一緒にいたいと、思うのは駄目、ですか？」

途切れ途切れに言う蘭の目には涙が滲んでいた。それに秋二は応えない。

「蓮さん、勘定お願いします」

苦笑いを浮かべながら秋二はお盆に食器を重ねて流しに持って行く。そのままレジで支払いをする合間に、弾と蘭の母親である蓮さんに何かを渡していた。

「悪かったな弾、今日は先に帰らせてもらうよ」

そう言っただけ秋二は俺を置いて帰っていった。残された俺達は蘭の分の食器も流しに出して、その後は弾の部屋でゲームやら漫画やらで時間を潰していた。

10・ドラマチック生命体（後書き）

ようやく十話目ですね。

ここまで読んでいただいた方には真に感謝いたします。

これからも誠心誠意まごころこめて執筆していきたいと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5327y/>

ドッペルゲンガー

2011年11月27日00時57分発行